

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820004

研究課題名（和文） マイトラーヤニー サンヒター「祭火の礼拝」章訳注研究

研究課題名（英文） Preparatory Studies of MaitrāyaṇīyaSamhitā I 5

研究代表者

笠松 直 (KASAMATSU SUNAO)

仙台高等専門学校・総合科学系・助教

研究者番号：40510558

研究成果の概要（和文）：

インド最古層の散文祭式文献『マイトラーヤニー サンヒター』の「祭火の礼拝」章訳注研究出版に向けての研究を行った。当該章の構成を分析し、祝詞部分と解釈部分との間の関係を考察した。普通「天界」を意味する語 *svargā* の特徴的な語法に着目、『マイトラーヤニー サンヒター』散文部分が類書と比してより古層に属する可能性を指摘した。ヴェーダ文献成立史解明に資する発見である。また、人類の祖先マヌを巡る、同章に含まれる儀礼の興味ある縁起譚をとりあげ、その制作意図を解明した。

研究成果の概要（英文）：

The *agnyupasthāna*, “adoration of the sacred fires”, is an obligatory rite for sacrificers performed after the evening *agnihotra*. Only few attempts have so far been made at this rite. The aim of this study is to examine *MS I 5*, treatment of the *agnyupasthāna*.

MS I 5, 1-4 records the formulas for this rite and *MS I 5, 5-12* contains the corresponding *brāhmaṇa*. Mantras of *MS I 5, 1* are mentioned in *MS I 5, 5-6* separately. *MS I 5, 5* deals with a daily *agnyupasthāna* performed after the evening *agnihotra* while *MS I 5, 6* treats the *agnyupasthāna*, which should be performed once a year.

In *MS I 5, 5* *svargā-* (heaven) is used as adjective likewise in RV, AV, YS’ s mantra-portion. From this fact it comes to know that MS’ s prose-portion belongs to an old stratum compared with other YSs. Again, I also dealt with an interesting story of the Manu’ s five sons described in *MS I 5, 8*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	630,000	189,000	819,000
2009年度	530,000	159,000	689,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,160,000	348,000	1,508,000

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学

キーワード：ヴェーダ、インド学、宗教学、古代宗教、原典翻訳、民俗学

1. 研究開始当初の背景

祭火礼拝儀礼は、元来、インド・イラン宗教儀礼の核心をなすものと考えられる。祭火を巡る儀礼はヴェーダの祭式から後代の密教の護摩に至るまで連なる伝統のうちであり、イランのゾロアスター教は祭火の礼拝を重んじる。

独立した重要な研究課題である。しかし、個別の言及はなされてきたものの、本儀礼そのものを扱った先行研究は少ない。

例えば J.GONDA は The Mantras of the Agnyupasthāna and the Sautrāmanī (1980 年) で「祭火の礼拝」儀礼に用いる祝詞を論題としたが、主として白ヤジュルヴェーダ学派の『ヴァーージャサネーイ・サンヒター』や成立年代のくだる諸派祭式綱要書に拠っており、より古層に属すると考えられる黒ヤジュルヴェーダ・サンヒター諸書への注意は十分ではない。

祭式綱要書は、原則的にはその学派のサンヒター（聖典）に依拠するものである。その所伝の歴史的位は、所属学派の祝詞集成部分・解釈部分の正確な理解に基づいて計らなければならない。

本研究代表者は博士論文にて、黒ヤジュルヴェーダ・サンヒターのひとつ『マイトラヤネーイ・サンヒター（以下 MS と略記）』「祭火の礼拝」章の訳注・検討を行った。

この際、ほぼ同時期に成立したと考えられる祭式文献のうち、『カータカ・サンヒター』と対照しつつ検討した。さらに『タイッティリーヤ・サンヒター』、『ヴァーージャサネー

イ・サンヒター』『シャタパタ・ブラーフマナ』の並行箇所との詳細な比較検討を行い、古層文献相互の関係を明らかにする必要がある。この基礎作業のうえに、初めて後代の諸祭式綱要書の伝える説を学派の系統ごと、学説の影響関係を考察・解明することができる。

2. 研究の目的

本研究はインド最古の散文文献の一つ、MS「祭火の礼拝」章の訳注研究の完成を目的とし、出版原稿作成を目指す。

インド古層祭式文献の紹介は少ない。本研究はインド最古の散文資料を主たる対象とするが、ここに含まれる説話・祭式議論等は宗教学・宗教史的に興味がある。

同書は難解であり、その予定する祭式儀礼の実際も明らかでない。この点の参考とするため、関連する諸情報すなわちヴェーダ諸文献の関連箇所を網羅的に検討対象とし、当該儀礼の形成発展史の解明を試みる。「祭火の礼拝」関連記述を最古期文献から網羅的に検討する研究は、これまでなされてこなかった。本研究はこの欠落を埋める一助となる。この検討は、同時に、「祭火の礼拝」章に即したヴェーダ文献成立史の解明ともなる。

こうした作業から得られる知見に基づき、MS「祭火の礼拝」章を改めて考察しなおし、訳注研究の精度を高める。個別の検討成果は言語学・宗教学・民俗学など隣接分野に資するものとなる。

3. 研究の方法

ヴェーダ諸文献のうち、特に古層に属する文献の「祭火の礼拝」関連個所の個別訳注研究を行い、この作業から得られる知見をMS「祭火の礼拝」章訳注研究に反映させ、これを精密化する。

博士論文の時点でMSおよび『カータカ・サンヒター』並行個所の検討を一応済ませた。引き続き黒ヤジュルヴェーダ文献のうち『タイッティリーヤ・サンヒター』(I 5,5—9; III 4,10)及び白ヤジュルヴェーダ派『シャタパタ・ブラーフマナ』(II 3,2—II 4,1)の「祭火の礼拝」関係部分の分析、考察を行なう。

両書は既に近代語(英語)全訳があるが、何れも出版後100年前後の時を経ており、最近の知見をもって学術的な翻訳を作成する必要がある。

この際、両派所属の祭式綱要諸書の説を確認する。これら諸本は、必ずしも自派聖典に忠実でない。自派聖典を逸脱しMS説を採用することもある。「早朝の手洗い」儀礼がその著しい例である。MSは他学派へ影響するところが大きかったかと思われる。特にMSを取り上げ、検討する所以である。

こうして並行諸文献の検討作業を完了し、その知見からMS「祭火の礼拝」章の訳注を再検討して精度を高める。

4. 研究成果

論文3ではMS「祭火の礼拝」章の構成を分析した。

「祭火の礼拝」を扱うMS I 5は14節からなる。1—4は祝詞部分、5—12がその解釈部分である。13節は「居住地の主人」に捧げる献供を扱い、解釈部分を先に立て、祝詞部分を後に置くことで特徴的である。14節では祭主が旅行をし、帰る際に行う祭火礼拝が扱われる。本論文においては祝詞部分冒頭MS I 5,1に対する解釈部分が二カ所(MS I 5,5および6)にあることの意味を解明した。

結論的にはMS I 5,5は『カータカ・サンヒター』並行個所の影響をうけつつ形成された、晩のアグニホートラ祭(祭火へのミルク献供儀礼)用の儀礼を述べ、MS I 5,6は祭火設置から一年間が過ぎる度毎に行われるべき特別の祭火礼拝儀礼を教えるものと判断される。

なおMS I 5,1末尾の2祝詞はヴェーダ文献を通じて他に一度も言及されない。古い祝詞であって、他の「祭火の礼拝」儀礼用祝詞の整備につれ使用されなくなったものと考えられる。このことは祝詞部分と解釈部分の間の成立年代差を示唆するものである。

論文1, 論文2では、MSが伝える焚き木投入儀礼を巡る起源説話の分析を公表した: 1から10までの自然数を足し合わせる計算の工夫($10 + (9+1) + (8+2) + (7+3) + (6+4) + 5 = 10 \times 5 + 5$)を、財産相続を巡る異腹兄弟間の同盟戦略の枠組設定に転用、余りの5人の勝利と当然予想されるその後の繁栄は当時「全人類」を意味した慣用表現「五つのマヌの子孫たち」の説明ともなる。

本稿は宗教学、説話研究の分野にインド最初期の散文文献の伝える特異な説話資料を提供したものである。なお本件については国際会議でも報告した(発表2)。

MS、『カータカ・サンヒター』、『タイッティリーヤ・サンヒター』の「祭火の礼拝」関連個所を比較考証、それぞれに所属する諸祭式綱要書の伝承を手がかりに祭火礼拝儀礼の発展史をたどることは、先に記したように同時に、「祭火の礼拝」章に即したヴェーダ文献成立史の解明にも繋がる。翻訳の精密化のため、特徴的な語法については全ヴェーダ文献を対象とした用例調査を行ない、語義とその変遷の次第を再検討もした。

この過程で名詞 *svargā-*の語法を巡って発見があった。

この語は、新層の散文部分では「天界」を意味する慣用的表現 *svargā-lokā-*を産み、のち単独で「天界」を意味するようになるが、古層の祝詞部分では形容詞用法が生産的である。本研究者はMS「祭火の礼拝」章散文部分に形容詞用法が残存していることに着目した。この用法は『カータカ・サンヒター』『タイッティリーヤ・サンヒター』には存しない。後二者はより新しい形容詞語形 (*s(u)vargya-*)を派生させている。

即ちこの事実は、MS散文部分の文体の古風であること、さらにはその成立が古層に属するであろうことを示唆し、MSの、とりわけ祭火の礼拝」章の史料的価値の再評価を要求する。

発表1では上述の事情を報告した。本発表は学会にヴェーダ文献の成立過程、言語段階について明確な一指標を提供したものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. Sunao Kasamatsu, “Manu and his five sons”, 14th World Sanskrit Conference. Abstracts. (査読有) 2009年, 13頁
2. 笠松直 「マヌと五人の息子たち」『論集』(査読有), 35号, 2008(2009)年, 38-50頁
3. 笠松直 「Maitrāyaṇī Samhitā 「祭火の礼拝」章の構成について」『印度学佛教学研究』(査読有), 57巻2号, 2009年, 839-843頁

[学会発表] (計3件)

1. 笠松直, 「*svargā-* 「天界」の原義について」, 印度学宗教学会 第53回学術大会, 2010年5月30日 大阪国際大学守口キャンパス (大阪府)
2. Sunao Kasamatsu, “Manu and his five sons”, World Sanskrit Conference. 2009年9月3日 京都大学 (京都)
3. 笠松直, 「Maitrāyaṇī Samhitā 「祭火の礼拝」章の構成について」, 日本印度学仏教学会第59回学術大会, 2008年9月4日 愛知学院大学 (愛知県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

笠松 直 (KASAMATSU SUNAO)

仙台高等専門学校・総合科学系・助教

研究者番号: 40510558